里山または山に関する人間の内面的なランドスケープ特性に関する考察

○髙橋　俊守＊

１．はじめに

「里山」という言葉は、漢字の里と山を組み合わせた熟語である。里山は、奥山や深山に対して、集落の近くにある生活に結びついた「山」を意味する言葉として、少なくとも江戸時代には全国各地で呼称が定着していたとされる。しかし、言語としての「山」の意味内容は幅広く、語源についても多くの説がある。現代においても、「国土地理院では山の定義はしていません。辞典等によりますと、山というのは、周りに比べて地面が盛り上がって高くなっているところと言われています[1)]」とされている程である。

里山をはじめとしたランドスケープを特徴付ける要素には、地質、地形、水、土壌、気候、植生などの自然的要素をはじめ、土地利用、都市計画、土地所有、歴史などの社会文化的要素がある。しかし、これらの tangible な要素だけで山のランドスケープ特性を把握することはできない。これらに加えて、intangible な要素、すなわち人の記憶や連想、五感による受けとめといった人間の内面的要素との関係も大きいため、これらにも目を向ける必要がある。山の意味内容を多様にして、一般化した定義を困難にしているのは、ランドスケープ特性に関わる内面的要素の多様性によると考えられるからである。

本稿では、山のランドスケープ特性についてこれまでに行った研究の中から、山に関する人間の内面的要素に着目した成果の一部を報告する。このためまず、栃木県における言語としての「ヤマ」の用法の特性について示し、続いて地図上に記載された山名の分布特性について採り上げる。

２．栃木県における「ヤマ」の用法

筆者は、栃木県の農山村を訪ね歩いて聞き取り調査を実施してきたが、これまでのところ里山が用語として定着している様子を確認できていない。里山という言葉が知られていないというわけではないが、集落に近い山で、いかにも里山と呼称することができそうな地域であっても、住民からは単に「ヤマ」としか呼ばれていなかった。

民俗学者の福田は、定住地としての領域としてムラが中心にあり、その周辺に生産地の領域としてノラがあり、その外側に採取地としての領域としてヤマがある同心円状の模式図を示した[2)]。ところが、栃木県方言辞典では、ヤマとはノラすなわち田畑をも意味するとされている[3)]。そうすると、栃木県で福田の模式図を当てはめようとしても、ムラの周辺にはヤマしかないことになる。

一方で、山と森ないし林は、異なる語源を持つにもかかわらず、概念的に共通部分が多いことから、類似した意味内容を指す言葉として用いられてきたことが知られている。例えば埼玉県で、屋敷林や平地林をヤマと言っていたことが示すように、ヤマとは、必ずしも傾斜を伴うような山岳だけではなく、むしろ平地にある森や林を示す呼称として用いられてきた[4)]。以上から、栃木県におけるヤマは、里における田畑や平地林、傾斜地に見られる山林を含む、より広い地域を指し示す言葉として用いられてきたと考えられた。

全国的には、平地と傾斜地それぞれの樹林をヤマと呼称する場合としない場合があることが知られている[5)]。この調査は、全国の都道府県を対象にしているものの、1 つの都道府県でのサンプル数は限られており、また地域性を生じる要因については言及されていない。そこで本研究では、栃木県におけるヤマの用法について、詳細な空間分布を明らかにするためのアンケート調査を実施するとともに、用法の地域性に影響を与えている要因を分析した。

アンケート調査は、幼少期から栃木県に居住し、大きな転居をしていない 60 歳以上の 79 名を対象に、対面ないし電話を用いて行った。質問内容は、「平らな場所に木が生えているところをヤマと呼びますか」とした。調査の結果、「ヤマ」と呼ぶ回答者は 37 名、「ヤマ」と呼ばない回答者は 42 名であった。回答内容と居住地を GIS で示すと、平地林の呼称に関するヤマの用法の空間分布には集塊性があり、地域性が認められた。

次に、GIS を用いて居住地から半径 1km、5km、10km のバッファーを発生させ、各バッファーの中で、平均傾斜角、山の数、標高の高低差、標高の標準偏差、標高の平均値について統計量を算出した。ここで「山の数」とは、地理院地図に山名が記載されている山の数とした。標高や傾斜角は、国土地理院基盤地図情報 数値標高モデル（10m メッシュ、250m メッシュ）から作成された標高・傾斜度 4 次メッシュデータを用いた。解析は、R4.1.2 を用いて、平地にある樹林地を「ヤマ」と呼ぶ回答者グループと呼ばない回答者グループの間に有意差が認められる要因を特定した。

以上の分析の結果、1km、5km、10km バッファー内の平均傾斜角（$p<0.01$）、1km、5km バッファー内の標高の高低差（$p<0.01$）、10km バッファー内の標高の高低差（$p<0.05$）、1km、5km、10km バッファー内の標高の標準偏差（$p<0.01$）、1km バッファー内の標高の平均値（$p<0.05$）、5km、10km バッファー内の山の数（$p<0.01$）において、有意差（Mann-Whitney U-test）が認められた。

これらの結果は、平野部では平地林をヤマと呼ぶ例が多い傾向を示しており、国立国語研究所による調査結果を支持するものであった。本研究ではさらに関係する要因について詳細なスケールで分析を行

＊宇都宮大学大学院地域創生科学研究科

ったところ、周囲に山が多く分布し、比較的標高が高く、起伏に富み傾斜地が多い場所では、平地林をヤマと呼ばない傾向があることを見出した。このような場所は、森林と山の傾斜地が一体化した山林が卓越する地域であった。

３．栃木県における山名の分布

国土地理院の 2 万 5 千分の 1 地形図に記載されている山名・峠名のほか、自然地域名称や登山の対象としてのピーク、各地域の人々に係わりの深いと思われる山名をあわせると、全国にはおよそ 25,000 の山や峠が認められるという[6]。そこで、国土地理院による電子国土基本図（地図情報）と日本山名辞典をもとに、栃木県の範囲で地図に記載された山名を抽出して GIS データに整理したところ、地図情報に 297、辞典に記載された山をあわせると栃木県全体で 338 の山名を確認することができた。

標高について見ると、磯山の 51ｍが最低で、白根山の 2,578ｍが最高である。低山から高山まで標高差が 2,500m 以上あるのは、山の成立由来が造山運動や火山活動等様々であることに加えて、関東平野から山地への移行帯にあり、低山から高山まで多様な標高の山を擁する栃木県の特性を表している。

GIS を用いたカーネル密度推定によって、山名密度が高い地図上の地域を示した結果が図-1 である。なお、ここでは山名の位置情報を山頂部にあるものとして分析した。山名密度の空間分布は、地形に基づく山の空間分布の傾向とは異なっていた。栃木県で山名密度が高い地域について、主な特徴は次のとおりである。

まず、栃木県で最も山の密度が高かったのは、宇都宮北部の古賀志山地の低山帯(A)であった。中心付近は日光街道が縦貫し、その東側には篠井金山があり、かつては「金山千軒、徒千軒」と言われるほど賑わい、戦後も銅や亜鉛の採掘が行われていた鉱山が見られる。また、かつては修験道や山岳修行が盛んで、山頂に石祠が残る山が多くいことで知られている。現在は、低山ハイキングコースとして人気で多くの人が訪れている。

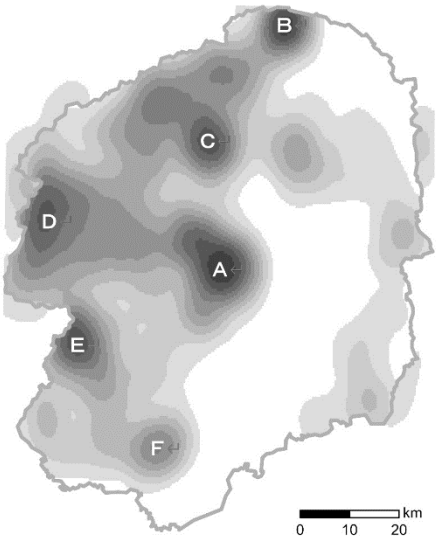

図 - 1　カーネル密度法による栃木県で山名密度が高い地域

A 宇都宮北部の古賀志山地
B 那須火山
C 高原火山
D 日光火山
E 足尾山地北部
F 足尾山地南部

次に山の密度が高かったのは、栃木県の北端にある茶臼岳を中心とした、朝日岳、三本槍岳、黒尾谷岳、南月山等の那須岳(B)であった。那須連山は火山活動が活発で、その周囲は古くから温泉地として賑わい、西側には会津中街道が縦貫していた。茶臼岳中腹にある温泉の湧出地は白湯山と言われ、古くからある修験道の霊場で、山域には当時の名残を留める石造物も各所に残されている。この他、那須火山帯に沿って、山岳信仰が盛んだった鶏頂山、釈迦ヶ岳等の高原火山(C)、日光市西端の修験道が盛んだった男体山、白根山等の中禅寺湖周辺の日光火山(D)でも山の密度が高かった。

この他、栃木県南部の栃木市や佐野市にかけての山岳信仰があった根本山とその周辺の足尾山地(E)においても、低山の密度が高い地域が認められた。足尾山地の南部にかけて、平安時代の山城跡が残る唐沢山から佐野市北端にかけての地域、日本三大霊山として信仰を集めた岩船山、万葉集の和歌にも詠まれた三毳山等がある栃木市の歴史ある低山帯(F)にも山名が多く分布している。

以上をまとめると、栃木県において山名の密度が最も高かった地域は、低山帯では足尾山地や古賀志山地等、金鉱の採掘や山岳信仰、修験道等で人と山の関係が歴史的に深い地域であった。高山帯では、山岳信仰や修験道の霊山としての役割が今なお残されている、北部の那須・高原・日光の火山であった。これらの結果は、山名の地理的分布には、山の形成に関わる自然文化的要因に加えて、歴史や信仰に基づく人と山との関係に基づいた人間の内面的要因が反映されていることを示唆するものと言えるだろう。紙面の関係でここでは省略するが、信仰や民間説話・歴史に由来すると判断できる山名の割合は、半数に及んでいたのである。

本稿の一部は、筆者による「山のランドスケープからみた栃木の地域特性」[7]を加筆修正したものである。修士課程で関連する研究を行ってくれた阿久津瞳さん、大坂咲来さんにもお礼申し上げる。

補注及び引用文献

1）国土地理院国土の情報に関する Q&AQ2.8：山の始まりは、どこですか？
https://www.gsi.go.jp/kohokocho/FAQ2.html#Q2.8
2）福田アジオ『日本村落の民俗的構造』弘文堂（1982）
3）森下喜一『栃木県方言辞典』桜楓社（1983）
4）丸山徳次・宮浦富保『里山学のすすめ』昭和堂（2007）
5）国立国語研究所『日本言語地図第 4 集』大蔵省印刷局（1970）
6）徳久球雄・石井光造・武内正編『三省堂日本山名辞典』三省堂（2004）
7）松村啓子・鈴木富之・西山弘泰・丹羽孝仁・渡邊瑛季編『大学的栃木ガイド』昭和堂（2023）